西田哲学会会報

第十四号

題字　上田閑照

発行・西田哲学会
〒九二九-一一二六
石川県かほく市内日角井一番地
石川県西田幾多郎記念哲学館内
電話（〇七六）二八三-六六〇〇

西田哲学会第十四回年次大会報告

石井砂母亜

西田哲学会第十四回年次大会が、平成二十八年七月二十三日（土）、二十四日（日）の両日、御茶ノ水駅からすぐの明治大学駿河台キャンパスにおいて開催された。

初日（二十三日）午前の部では、講読部門『善の研究』勉強会が松本直樹氏と太田裕信氏の担当のもとに開かれ、昨年の続きである第二編第三章をフロアーと分かち合った。講読部門と並行して行われていた外国語セッションが今年度は開かれなかったものの、多くの参加者に恵まれる会となった。

同日午後の部では、新会長秋富克哉氏による挨拶と共に、若手幹事でもあった故杉本耕一氏の逝去の知らせが告げられ、その若すぎる死を悼み想う時をもった。講演会は、石井砂母亜（跡見学園）の司会のもとに、大橋良介氏（日独文化研究所）による講演「〈大地の思想〉のポテンシャル――鈴木大拙没後五〇年」、小野寺功氏（清泉女子大学名誉教授）による講演「西田哲学から聖霊神学へ――トポロギー神学の成立をめぐって」が行われた。

大橋氏は、「大地-上に-有ること」（Auf-der-Welt-Sein）としての人間存在が、大地の危うさと小ささを映す存在でもあると指摘する。大地は人間にとっては我欲や所有欲の土壌でもありながら、精神の内面性を帯びる母性の象徴でもあり、そのような意味で大地とは矛盾的なるものである。大地は、天体観測的には小さいがそこで生活する私たちにとっては基盤であり、フッサールやハイデガーの思索に見るように、生活経験・身体経験としては、それは動かざる「原-箱舟」としての性格を持つ。大橋氏は、その動かざる大地が生命の根源として生命を育むものであると同時に、善人をも悪人をもそのままに包む大悲であると言及され、大拙において大地とは、日本的霊性が根づく生命の根源であり、穢土を包む浄土と重ねられると結論づけられた。

小野寺氏はご自身のこれまでの研究の歩みが、日本におけるキリスト教徒としての自己意識の確立と、いかにしてカトリック神学の日本的展開を図れるかという課題にあったと言及された。また、岩手という風土を通して醸成されたご自身の大地性、また敗戦をきっかけに貪るように読んだ鈴木大拙、吉満義彦、西田幾多郎の著作との出会い、このような思想的な背景を通して西田哲学を媒介としたキリスト教神学が構築されてゆく様を丁寧に示された。西田哲学における「絶対無の場所」は、キリスト教的には聖霊の遍満す

る場所である。この発想のもとに「三位一体の場の神学」（トポロギー神学）が確立され、この発想を通して仏教とキリスト教との対話、またキリスト教における新しい宗教改革の可能性が開かれる。こうした道は、従来のキリスト教とは逆対応的に「聖霊において、キリストを通して、御父へ」と導かれる道であり、小野寺氏は西田哲学を聖霊論の文脈から問い直すことを通して、西田哲学のうちに秘められた新たな可能性を開くことになると思われると結論づけられた。

二日目（二十四日）午前の部では、外国語による発表も含めて四名の研究発表が行われた。板橋勇仁氏（立正大学）の司会のもとに熊谷征一郎氏（京都大学）「行為と絶対否定――ヘーゲルとの関係から見た西田哲学」、白井雅人氏（東洋大学）の司会のもとに張煒氏（東京大学）「歴史における個体――西田幾多郎と牟宗三の比較を通して」、田中裕氏（上智大学）の司会のもとにデヴィッド・ジョンソン氏（ボストンカレッジ）〝Cultivating the Interlacing of Self and World: Nishida and the Phenomenology of Perception〟、米山優氏（名古屋大学）の司会のもとにジャサント・トランブレー氏（北海道大学）〝Translating Nishida Kitaro's 〝Self-Awareness: The System of Universals〟: Syntactic analysis by coloring keywords〟と題した研究発表が行われた。熊谷氏は、西田とヘーゲルが潜在・顕現という観点から諸事象の生起を語る点に注目し、両者の哲学にとって潜在・顕現論は共通の根本モチーフであると指摘する。しかし、すでに自立的に潜在している事柄の顕現がヘーゲルの潜在・顕現論であるのに対して、西田の顕現論はどこまでも基体なく出現するという「無基底性」に支えられている。西田の語る歴史的世界の創造は「無からの創造」であり、その点でヘーゲルのそれとは大きく袂を分かつものだと熊谷氏は論じられた。張氏は、近代東アジア哲学の優れた代表として西田幾多郎と牟宗三を取り上げ、両者の歴史概念に注目する。その時間論「永遠の今の自己限定」に見るように、西田において歴史は世界の根源を示す概念としての性格が強い。他方で、牟は歴史上の個々の現実に関心を向けている。一見すると両者には違いが見られるが、牟は歴史上の個人の行為の背後に精神実体の働きを見ようとし、西田も人間の行為が歴史を、歴史が人間を規定する弁証法的関係を説いており、両者の歴史は

ともに超越的な性格を持つ。それゆえ張氏は、両者の歴史理解には個体が歴史に飲み込まれる危険性を孕んでいると指摘する。西田哲学が田辺の批判に真に答えうるかという問いも含めて、フロアーに問いを開くかたちで発表を終えられた。ジョンソン氏は、個人が世界の一アスペクトと見なされるようなダイナミックな存在論を西田が展開したと指摘する。自己と世界が相互に限定し合うと見なした思想家は、他にもハイデガーとメルロ＝ポンティがおり、ジョンソン氏はこれらの思想家を挙げながら、自己が世界とその対象を限定する仕方についての西田の議論に注意を払う。われわれは自己形成へと開かれており、われわれがいかなる存在となりうるかによって、知覚経験において物がどのように現われるかが決定されるとジョンソン氏は論じられた。トランブレー氏は、特に翻訳ということを意識されながら、難解な西田哲学を読み解く新しい方法として、ある一節を六つのモードに解体しながら可視化していく試みを行なった。今回のご発表では中期西田のテキスト『一般者の自覚的体系』の一節を取り上げ、「Encompassing 包含すること」「Position 立場」「Superposition 重なり合い」「Determination 限定」「Transcendance 超越性」「Relation 関係性」という六つのモードを色分けして示し、難解なテキストを読み解く新たなる方法を問題にされた。

同日午後の部では、総会を経てから、「現象学と西田哲学」と題して、榊原哲也氏（東京大学）の司会のもとに田口茂氏（北海道大学）「閉じた個という不合理――フッサールと西田における他性の謎」、村井則夫氏（明星大学）「超越論性の変容――西田とハイデガーにおける媒介と像」、加國尚志氏（立命館大学）「キアスム、非連続の連続――西田哲学と後期メルロ＝ポンティ存在論の接するところ」と三氏を迎え、シンポジウムが行われた。ここでは詳細を紹介するのは控え、シンポジウム報告に譲りたい。なにより、今年度の大会は両日猛暑日であったにもかかわらず、会員非会員問わず多くの方に会場までお足を運んでいただけた。この場を借りて、心から感謝申し上げたい。

『善の研究』講読会について

松本直樹

本学会の特徴の一つに、専門研究者以外の方々にも開かれた学会を志向していることがあります。その具体的な方策の一つが、ご承知のように、大会の初日に行われる「『善の研究』講読会」です。二〇〇三年の第一回大会を除いて、毎年、欠かさず開講され、幸い、多くの会員の方々にご出席いただき、親しまれてきたと伺っています。今年はこの「講読会」について、いつもより少し詳細な報告をさせていただきたく思います。

今年は私・松本直樹と太田裕信氏の担当で、『善の研究』第二編・第三章「実在の真景」を読ませていただきました。

参加された方はよくご記憶のことと思いますが、手順は次の通りです。まず、段落を目安に内容を小分けし、会場の方々に音読していただきます。その後、私たち担当者が簡単なコメントをつけ、さらに会場から自由に質疑討論を展開していただく、という段取りです。毎年、だいたいそんなふうだと聞いておりましたが、今年は事前に事務局から「参加者が六〇名を超えるかも」と脅されていて、担当者二人でずいぶんと悩みました。いくつかのグループに分けるべきではないかとか、いろいろ変なことも考えたのですが、結局、三〇名ほどの参加で、やり方もいつも通りということになりました。

ちなみに、参加者のなかには、担当である私たちよりずっ

と先輩の研究者の方もちらほら混じっておられて、これも例年通りであるようです。「どんな解説をしているのか見てやろう」という迷惑、もとい親切なお気持ちから顔を出されるのだと思いますが、おかげさまで、会場からの質問攻撃にたじたじとなったときなど、随分と助けていただきました。手前味噌になりますが、そういうやりとりも、傍で見ていてけっこう面白いのではないかと思います。

内容ですが、先にも書きましたように、今回の講読箇所は第二編第三章「実在の真景」です。ご承知のように、西田は『善の研究』で、実在とは私たちの意識現象、すなわち直接経験の事実に他ならないと言っています。今回の箇所では、そのような仕方で受け止められる実在の真実のありようが詳しく語られます。西田によれば、そこには未だ主客（主観・客観）の対立も、知情意（知識・感情・意志）の区別もありません。そこから、冷静な知のみを客観的な真理への通路となし、情意をたんに主観的・個人的なものと見做して真理から排除しようとする、典型的には自然科学的な世界観への、徹底的な批判が展開されていきます。

当然ながら、会場からも、このような西田の見方をとことん吟味しようという趣旨の質問が続出しました。「主客の別はないといっても、結局は主観に偏った、個人的なものの見方を中心に据えているのではないか」「科学的な世界観がもつ強力な客観性との関係をどのように考えているのか」等々、担当者が思わず一歩も二歩も退いてしまうような質問で、逆に議論が盛り上がったのではないかと思います。ご承知のように、西田が言う直接経験・純粋経験とは、個人的な主観を超えて、もはや「私の」経験であるなどとは言うことができない、その意味では徹底的に「客観的」な経験です。しかし、今回の講読箇所では、西田がいったん常識的な立場に譲歩して、主客が分かれたところから「それでも…」という仕方で論証を進めているところが目立ち、かえって興味を惹くところが多かったのではないでしょうか。

専門研究者以外の方々にも開かれた学会である（あろうとしている）、というのは、本学会のとても重要な特質であると考えます。先に〝「今年は六十人を超えそう」という情報で少なからず慌てた〟と書きましたが、これからもそういうことはあるかもしれませんし、むしろあってほしいというのが本来ではないでしょうか。聞けば、過去の大会では、講読会と並行して、「哲学サロン」なる自由茶話会や、講義形式の入門講座が開催されたこともあったようです。そのような様々な創意工夫を、これからも積み重ねていくことが大切かと思います。拙い進行ではありましたが、今回、出席された方々が少しでも楽しまれ、同じように感じて下さっていることを、心から願っております。

シンポジウム報告

「現象学と西田哲学」

秋富克哉

二日目の午後、恒例のシンポジウムが行なわれた。今年のテーマは「現象学と西田哲学」。過去の年次大会では、公開講演やシンポジウムで、新田義弘氏、村田純一氏、野家啓一氏、谷徹氏、斎藤慶典氏等々、各世代で日本の現象学研究をリードする方々にご登壇いただいてきたが、現象学を初めてシンポジウムテーマに立てた今回、担当いただいたのは、提題者に田口茂氏（北海道大学）、村井則夫氏（明星大学）、加國尚志氏（立命館大学）、そして司会者に榊原哲也氏（東京大学）と、今最も脂が乗り切っている現象学徒の面々であった。

まず、第一提題者の田口氏は「閉じた個という不合理――フッサールと西田における他性の謎」という表題のもと、意識の「境界」と「他者」をめぐる根本問題に、両哲学者の立場からアプローチを試みる。氏は、「意識には境界がない」ということを意識の「非文脈性」として現象学的に確認、そのうえで他者の現われに含まれる「境界なき他性」の問題を、最初にフッサールにおいて吟味する。氏によれば、前期フッサールにおける「無規定的な純粋意識」では、「他者」の問題は十全には答えられず、この挫折を乗り越えるため、フッサールは「原自我」の思想を提示する。自己統覚の働きを通して対象化される「私」と統覚の主体としての「私」の二重化、限定された「私」を常にはみ出す「私」という事態をフッサールは「原自我」のもと問題化するが、他者は、この原自我同様非文脈的に、文脈の彼方から私の中に現われる。他方、前期西田の純粋経験も非文脈的で非境界的な活動であるが、自他の差異は重視されていない。しかし、後年の論文「私と汝」になると、個人を超えて個人を限定するものを、自己と他者を媒介する「絶対の無」と捉え、「私の底に汝があり、汝の底に私がある」と語るようになる。自己と他者を媒介するいかなる第三者も排し、しかし他者は境界の外ではなく、私の底に、私と同じ場所に立つ。西田が「媒介するものなきものの媒介」と呼ぶ以上の事態を、氏は再びフッサールやレヴィナスと連関づけながら、この非文脈性によって語られる事態こそが「現実」そのものの核を成すと語る。

続いて第二提題者の村井氏は「超越論性の変容――西田とハイデガーにおける媒介と像」という表題のもと、西田とハイデガーの思惟の試みのうちに、ともに「超越論的思考」の自己変容ないし自己深化という共通性を認め、それを「媒介」と「像」という主題のもと考察する。

ハイデガーにとって現象学は、現われの場に立ちながら、現出を生起させる、それ自体は見えない媒体を見ようとする運動である。一方、前期西田の純粋経験は、直接的な立脚点であると同時に完全に媒介された実在と一致した到達点として、それ自身に潜在的な媒介の可能性を秘めている。ただし、当時の西田において、この媒介構造は主題化されていない。それは、純粋経験という直接知の原型とそれを叙述する学知の媒介的・反省的性格との関係が十分に取り出されていないことでもある。それに対しハイデガーは、最初の段階から知の媒介性格に自覚的であり、経験的な事実性と超越論的な反省との関係を、現存在の「超越」構造のうちに提示した。氏によれば、『善の研究』以後の西田は、「自覚」から「場所」へと展開することで、純粋経験では十分に取り出されていなかった媒介構造を、自覚における自己再帰的運動からさらに場所における「写す［映す］」という像論的な立場に向かい、「包む」という内在的な媒介の論理の性格を強めていく。そして、自己透徹的・映像的に「見ること」そのことである「絶対無の場所」の立場に立つ西田は、今度はそこからハイデガーの解釈学的現象学に対し、その地平的制約を批判するようになる。氏は、両者の思惟を超越論性の二つの側面として捉え、ハイデガーの立場が世界へと超えてゆく「超越」であるのに対し、西田のそれはむしろ「手前」への「内越（Ciszendenz）」とも言うべき事態であると特徴づける。

最後に第三提題者の加國氏は「キアスム、非連続の連続――西田哲学と後期メルロ＝ポンティ存在論の接するところ」と題して、メルロ＝ポンティに深い示唆を与えたフッサールの「生き生きとした現在」と西田の「永遠の今」を対比、両概念がともに、差異化していく脱自的な時間性における統一という根本的矛盾を前論理的なアプリオリとしていると理解する。西田の「永遠の今」は、一瞬ごとに消え（死）かつ生まれる（生）流れであると同時にすべての瞬間を包むものであり、「非連続の連続」として、私と汝、特殊と一般等、相矛盾するものを対

立のままに共存させるものである。それは「脱現前化」と「根源的現前」という「根本的矛盾」（メルロ＝ポンティ）の同時性を認めた「生き生きとした現在」に対比される。また、矛盾するものの同一性を「非連続の連続」「即」という媒介で示す西田の立場は、絶対否定を媒介とする弁証法であるが、そこから氏は、「生き生きとした現在」にも一種の弁証法が名指されないまま潜在するとし、それを「綜合なき弁証法」としての「超弁証法」と受け止めたメルロ＝ポンティの立場を考察する。否定の否定によって全体の同一性に回帰する弁証法に対し、「否定的なもの」によって導かれる生成の論理「超弁証法」は、矛盾対立の同時性と相互包摂における共存において「キアスム」と名指される。「キアスム」が、私と汝、私と世界等、現在の瞬間において接するかに見えると同時に非連続的に分離する、「切迫」という独特な同一性であるかぎり、「非連続の連続」との共通性を見出しうる。しかし氏は、両者の間の大きな相違を指摘することも忘れない。と言うのも、晩年の西田が「平常底」や「逆対応」において超越即内在、内在即超越の立場に立つ時、それはメルロ＝ポンティからすれば、否定的なものによる弁証法的綜合において静態性に至ることになるのではないかという問いが残るからである。ただし、人間の生死の矛盾が、西田が最後まで手放さなかった身体の矛盾として見られる時、氏は、このような矛盾が西田の最終的な宗教的境地においてはたして解決されうるかという問いを投げかけるとともに、身体の矛盾を生きる以外の生はないとして「矛盾としての身体」に行き着いたメルロ＝ポンティとの共通性を再び提示する。

以上、どの提題も趣旨明瞭でかつ内容満載、休憩時間には会場から「皆、本気過ぎる」という、ため息まじりの賞賛の声さえ聞かれるほどであった。後半は、榊原氏のリードのもと、三者相互のやり取りを経てフロアを交えた議論に進み、いずれも様々な質問と応答が飛び交ったが、延長時間も含め、瞬く間に予定時間は経過した。

周知のように、西田が現象学的テクストとして触れ得たのは、フッサールとハイデガーのごく限られたものである。にもかかわらず、それらとの批判的対決を経て展開した西田哲学が却って現象学のその後の展開と多くの主題において共鳴し呼応するように、現象学と西田哲学の間には、たえず新たな可能性が開かれている。企画運営の側としては、討論の時間が足りなくなったことが遺憾であり反省材料でもあるが、本テーマが汲み尽くし難いものであることに改めて気づかせて下さった提題者と司会者の四名諸氏に、改めて感謝申し上げたい。

エッセイ

回顧と抱負

―哲学館長に就任して―

浅見　洋

二〇一六年四月、石川県西田幾多郎記念哲学館長に就任した。今年度末が大学の定年なので、今は二足の草鞋を履いている。浅学非才の輩には荷が重いが、なすべき役割が与えられていることに感謝しながら、充実した日々を過ごしている。

回顧すると、初めて西田哲学の話を聞いたのは旧宇ノ気町役場で開催された第三十四回寸心忌（一九七八年）の記念講演会だった。演者は西田の六女梅子の夫で、ヘーゲル研究の大家・金子武蔵東大名誉教授。内容はほとんど覚えていないが、学識と人格の深さに圧倒されながら聞き入った記憶が残っている。参加のきっかけは当時非常勤講師をしていた石川高専の藤田晋吾教授（現筑波大学名誉教授）に誘われたからである。二十六歳、あれから三十九年、一筋にとはとても言い得ないが、ずっと西田哲学と関わってきた。

今年で三十六回を迎えた「夏期哲学講座」に初めて講師として参加したのは三〇歳、一九八二年の第二回講座であった。尻に汗疹ができるほど準備したにもかかわらず、参加者の猛者たち（既に多くの方々が鬼籍に入られた）にコテンパンにやっつけられ、毎年のように自己嫌悪に陥りながら秋を迎えた。一九九〇年から始まった市民向けの「西田幾多郎哲学講座」では、ほぼ毎年開講と閉講の講師を努めた。特別企画講演、寸心忌記念講演などを加えると、旧記念館と現哲学館での講演は六〇回を超えている。また、故橋本芳契先生の後を継いで一〇年ほど寸心読書会の講師をしたこと、西田幾多郎没後五〇周年記念講演集『西田哲学を語る』を猪谷一雄さんと共編したこと、現大橋良介名誉館長とともに開館前の学芸員・展示業者の選定、展示レイアウト等に携わったこと、西田哲学会の準備会議など、さまざまな思い出が蘇ってくる。

これまで所与（Gabe）を課題（Aufgabe）として、西田流に言えば「作られて作る」というスタンスで生きてきた。館長としての役割や仕事は自分に与えられ、課されたものと受け止めている。「哲学館条例」第一条には「郷土が生んだ哲学者西田幾多郎の遺徳を顕彰するとともに、哲学に関する情報を集積し、これを発信し、もって哲学の普及及び啓発を図るため、市民の精神修養の場として、哲学館を設置する」とある。私に与えられた課題はこの設置目的に

沿ってこれまでの事業を継続発展させることであるが、加えて新たな課題として受け止めなければならない所与が幾つかある。

一つは思索空間、住民の心のオアシスとして、哲学の普及、啓発のために講座、講演、企画展示等を現代のニーズを汲み取りながら充実させ、入館者の増加を図ることである。

今ひとつは、保存資料の公開と研究資料化である。没後七〇年を超えた現在、資料には汚損（破損、水損、カビ、インクの流れ等）したものも少なくない。アーカイブ化、翻刻を可能にするためには修繕、乾燥、ページの分離、洗浄等の処理が必要なものが含まれている。どこまで修復でき、公開できるかはまだ見通しが立っていない。また、それらが未公開か、公開する価値が有るか否かの判断も、既存の公刊物、公開資料と照合する必要がある。さらに、修復作業、独、英、和文混じりの手書き文書の翻刻、分析、解読には人、時間、経費的課題も多い。多くは西田哲学、日本哲学史研究にとっては魅力的な資料であり、館長として、研究者の端くれとして心躍る所与であり、課題である。しかし、出発地点にありながら「道遠し」という感は否めない。

理事会報告

平成二十八年度

第一回定時理事会

西田哲学会第十四回年次大会の開催にあわせて、平成二十八年度第一回定時理事会が、七月二十三日十二時二〇分より、明治大学駿河台キャンパス・リバティータワー一一四二教室にて開催された。出席理事は二十二名（委任状出席五名を含む）で、理事以外に幹事六名が出席した。

●第十五回年次大会について

平成二十九年七月十五日（土）～十七日（月）に、学会年次大会を、かほく市による国際シンポジウムとあわせて、石川県西田幾多郎記念哲学館（石川県かほく市）を会場に開催することが決定された。

●秋の理事会開催について

秋の理事会を、平成二十八年十一月十三日（日）に京都で十三時三〇分から開催することが決定された。

●事務局からの報告

（1）平成二十七年度会計報告、平成二十八年度予算案が事務局から提示され、審議を経て、承認された。

（2）入会希望者、退会希望者、除籍候補者が事務局から示され、審議を経て、入会、退会、除籍がそれぞれ承認された。ただし、会費未納の除籍候補者および郵便物が届かない会員のなかに知り合いがいれば連絡を入れることが確認された。

●編集委員会からの報告

（1）編集委員の委嘱：昨年度七月二十六日開催の理事会において、編集委員を三名から五名に増員すること、田中久文理事、大熊玄理事、水野友晴理事が編集委員に就任することが決定されていたが、その後、嘉指信雄氏、嶺秀樹氏に対して編集委員を委嘱し、両氏がこれを承諾されたことが田中久文編集委員長から報告された。

（2）『西田哲学会年報』について：田中久文編集委員長から下記の五点が諮られ、いずれも承認された。（1）従来『年報』の執筆者に抜刷を無料で送付していたが、第十三号からはこれを廃止してＰＤＦ化した抜刷を送付し、希望者は実費にて抜刷印刷を出版社に直接申込むこと。（2）『年報』の論文掲載について、これが査読を経たものであるかの照会をうけた場合、査読を証明する書類を発行すること。（3）『年報』への投稿について、原稿の到着の信頼性を確保する意味から、事務局のメールアドレスに加えて、事務局と編集委員長の双方が見られるアドレスにも原稿を送信することとし、第十三号以降の『年報』にその旨記載すること。（4）『年報』の電子化のため、他の学会が取り組んでいる事例等を収集すること。（5）書評の対象となる好著があれば編集委員に推薦すること。

（3）『西田哲学会会報』について：田中久文編集委員長から『会報』の記事執筆の依頼が、出席の理事と幹事に対してなされた。

●その他

（1）幹事の補充について：杉本耕一幹事の逝去のため、幹事会で幹事の補充を検討し、秋の理事会に議案として上程することが確認された。

（2）英語版ウェブサイトについて：事務局の中嶋優太幹事から、日本語版ウェブサイトを翻訳した英語版ウェブサイトのアップロードが報告され、気づいた点があれば事務局に意見を寄せることが確認された。また、英語版に実装する掲示板について、近々ＩＤとパスワードの発行が行われることが中嶋幹事から報告された。さらに、英語以外の言語のウェブサイトを作成すべきかについて中嶋幹事から質問があり、秋の理事会で改めて審議することが確認された。

（文責・水野友晴）

「西田哲学研究基金」について

二〇一六年度、第十一回の西田哲学研究基金公募には一件の応募があり、厳正な審査の結果、以下の翻訳出版事業に五〇万円

を交付することになりました。

Antonio Florentino Neto 氏（ブラジル・カンピナス大学）代表

『善の研究』ポルトガル語訳出版

今年度も引き続き、交付基金を公募します。一件につき三〇万円から五〇万円で、数件の採択を予定しています。西田哲学に関係するテーマ研究のほか、翻訳出版、研究のためのプロジェクトも応募の対象になります。過去に不採択になった場合でも、内容を整えて再申請することは可能です。応募要領は以下の通りです。

（i）提出書類

①履歴書、②研究計画（八百字程度）、③翻訳出版の場合は出版社との契約書。

（ii）提出先

原則として次の宛先に電子メール添付でお願いします。

keta.masako.6w@kyoto-u.ac.jp

（郵送の場合は、

〒六〇六―八五〇一

京都市左京区吉田本町

京都大学文学研究科

氣多雅子研究室）

（iii）締め切り

二〇一七年四月二日（土）必着。

（iv）備考

①ほぼ二年以内という目処で、研究成果報告を提出していただきます。

②翻訳出版の場合は、訳稿完成を前提に出版社との契約がなされることが通常なので、ほぼ一年以内に出版図書の見本を提出していただきます。助成金は出版社に渡されます。助成金交付の際には、出版書籍に本西田研究基金からの助成を受けた旨を印刷記載してください。また出版図書二冊を本基金に寄贈して頂きます。

③研究成果の提出は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書のいずれか、とします。提出先は、上記の氣多研究室です。

（文責・西田哲学研究基金運営委員会二〇一六年度代表・秋富克哉）

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会［於京都］

西田哲学研究会では、オープン参加のもと、ほぼ三ヶ月に一回のペースで西田の著作を読みながら討論を行っています。『善の研究』を十回かけて読み終え、続いて『自覚に於ける直観と反省』、『意識の問題』、『芸術と道徳』の主要箇所をそれぞれ数回取り上げました。その後『働くものから見るものへ』の主要論文を扱い、前回から「場所」に入りました。会員の希望もあり、時間をかけてじっくり取り組む予定です。連絡先は左記です。

幹事：秋富克哉（akitomi@kit.ac.jp）

案内は、原則としてメールで行ないますので、参加ご希望の方は、このアドレスまでふるってご連絡下さい。お問い合わせ等もお待ちしております。

（文責・秋富克哉）

・西田哲学研究会［於東京］

毎月一回、読書会を開催しています。原則として第三土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。次回の開催日時、開催場所、テクストをお知らせいたします。また、当研究会では毎年、研究会誌『場所』を発行しています。

西田哲学研究会事務局

nishidaphi@gmail.com

（文責・西田哲学研究会事務局　濱田）

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんの応募をお待ちしております。なお次の第十四号掲載分は、編集の都合上、平成二十八年（二〇一六）年十二月末をもって一つの区切りといたしますのでご了承ください。

「年次大会」における口頭発表の応募について

第十五回年次大会（平成二十九年七月開催）の口頭発表者（日本語または英語）を公募します。発表希望者は、来年三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申込ください。

編集後記

今年の年報の応募の多くが海外からのものであった。改めて西田哲学の国際化をみる思いがした。近年、経済を中心としたグローバル化の負の側面が顕著となり、国民国家や地域文化の重要性を見直すべきだといった議論も目立つようになってきた。しかし、いうまでもなく、それが閉鎖的なものとなってはならない。

西田哲学では、日本やアジアといった地域の伝統に根ざしていこうとする眼差しと、それを普遍的なものへと開いていこうとする眼差しとが交差している。そうした複眼的な視座こそが今求められているものであり、だからこそ、海外の多くの研究者を惹きつけるのではないかと感じた。

（編集委員長　田中久文）